



旧成法寺村（南本町）にある伴林君光平碑
伴林光平君碑文と解説

八尾市伴林光平翁の会

2024年3月30日

伴林君光平碑

君、諱は光平、通称は六郎、家は世、志紀郡林村尊光寺の住侶たり。考、諱は謙讓。君は其の第二子なり。少壯、出でて洛寧の間に遊び儒仏を究め、因攝の間に国典を修む。後又伴信友の江都に從う。然るに宗主責むるに其の放浪破規を以てし、帰任の急ならんことを促す。君甚だ窘色有り。信友、慰め論し且つ囑して云う、「倭河二州には皇陵星布す。而るに荒廢埋歿せり。我、探討檢覈せんと欲するの日、久し。而して未だ果たさず。吾子其れ之を成せ」と。君、感憤して帰郷し、再び緇衣を被て周永と称し若江郡八尾郷成法寺村教恩寺に住職す。此の地、実に其の址たり。君、状貌魁岸、音吐鐘の如く、天資豪宕にして小節に拘らず。一裘一葛自甘んじ、富貴にも翳せず、名器も卷かず。傾檐破壁に書を講じ月に吟じて晏晏如たり。然りと雖も其の皇典を説き大義を論ずるや、凜として懦夫を起たしたしむるの概有りて、一意唯皇運の恢復を図る。間有れば則ち風雨を冒して荆棘を披き、山河を跋涉して聖蹟を探検し、之を旧記に攷え、之を遺老に正し、遂に陵墓十七図を製し、遙かに之を信友に贈る。事、天閻に達し、特に優詔を賜う。君感激し益報、効して国事に尽さんことを期す。是の時に方り幕府は屢詔勅に違ひ、且つ外交措を失す。政論鼎沸し朝野騷擾す。君、大いに之を憂へ、志士を糾合し將に為す所有らんとす。会文久三年癸亥の秋、

廟謨一決、車駕、南幸して畝傍の山陵を拝し、而うして親しく外夷を攘うの議有り。時に、藤本真金、吉村重郷、松本衡等胥に謀り、前の侍從中山忠光を推して盟主と為し、將に義を十津川郷に唱えて其の先を為さんとす。君、身を挺して之に赴き、参画甚だ力む。然るに会薩二藩、朝幕の間に周旋し、廟堂の議動き、條公等七卿西奔す。順逆欵交、雄図空しく敗れ、遂に幕吏の捕うる所と為り、幽囚月を閲す。其の獄に在るや、自ら其の拳を叙して南山踏雲録在り。元治元甲子の年二月十六日、京の獄に斬らる。享年五十又一。空論横議は儒生の能くする所、悲歌慷慨は壯士の喜ぶ所、草奔にして義を唱えてその徒を率い、矢石に劍を提げて其の仁を成すに至つては、則ち吾之を忠正剛毅の土に見る。而うして君は実に其の人たり。明治二十四年十二月十七日、朝廷其の忠節を追賞し特に従四位を贈らる。余榮有りと謂うべし。今茲に郷儻相謀り碑を建て名を勒す。貞珉は萬古にして遺烈は千秋たらん。

大正三年十一月

松蔭 大西啓太郎 撰

銅柱 渡辺信義書

伴林光平君碑

伴林光平は、本名を光平、通称を六郎といった。光平の生家は、代々志紀郡林村の尊光寺の住職であった。光平の父の本名は謙讓といい、光平はその次男であった。

光平は、八歳の時に母を亡くしたが、生前に生まれ育った福万寺村の家まで何度かきたことがあり、思い出を忘れず、尊光寺より5キロ離れた、西願寺に養子に出された。住職徳門の世話になり、平田竹軒より漢学を学んだ。竹軒は光平の才能を活かせるため、西本願寺の学寮に入ることを勧めた。若く血気さかんころ、京都や奈良で儒学や仏教を研究し、兵庫の伊丹で、わが国の古典を勉強した。因幡に行き、飯田秀雄翁より国学と歌の道を学び、息子年平と親しくなり、伴林光平の名をつけてもらった。その後も家に帰らず江戸に行き、そこで伴信友の自宅を訪ねた時、信友の手もとに、養父母のどちらかが患っていることを聞かされた。師信友は門下生を取らない、歌を望まれ、二首を

献じ認められる。だが、直ぐに帰るように説得された。その上で、君に頼みがあるのだがと、一つのことを提案された。「大和と河内の二国には天皇陵が星が散らばっているようにたくさんある。しかしその御陵は荒れはて、御陵であるかどうかさえさだかでないほどの状態になっている。私はそれらの御陵を実際に訪ね、実情を調べたいと、長い年月考え続けてきたが、まだ実行できないでいる。君は私に代ってこの願いを達成してくれたまえ。」といったのである。(君の家は河内にある。御陵の調査研究にはうってつけの場所にある。君が家に帰れば兄君もよろこぶし、私の願いも叶い、君が学ぶ国学にも益することになるのではないか。)光平は伴信友のことばに感激し、故郷の河内に帰った。そして再び墨染めの衣を着て周永と名のり、若江郡八尾郷成法寺村の教恩寺の住職となった。この碑の立っている所が、実にその寺の跡なのである。

光平は顔かたちが大がらでたくましく、かどがあり、

声は鐘が鳴り響くように大きかった。性格は生まれつき太つ腹で、小さなことがらにこだわらなかつた。着るものは冬の着物が一枚、夏物が一枚あればそれで充分だとし、金銭や地位・名譽に目がくらむことなく、すぐれた道具を集めてたのしむということもなかつた。軒が傾き壁がこわれたあばらやに住みながら、そこで古典を講義したり、花鳥風月を楽しんで和歌を詠むなど(世俗的な欲望には無頓着、精神生活は高雅で充実した暮らしぶり)で心はいつも安らかであつた。しかしながら、そうした静かな暮らしの一方、こと天皇に關しての古典を解説したり、尊皇の大義を論議するとき、その気魄は凛々としてすさまじく、意くじのない男子をも奮いたたせるほどの強い氣象があり、ただ一心に天皇のご運を昔にとりもどすことを考えるのであつた。ひまがあるとすぐに、風雨が激しくともおし切つて出かけたり、人が通らぬままに生い茂つたいばらの道を切りひらいたりしながら、山を越え川を渡り、かずかずの困難をおかして皇陵を調査してまわつた。そうした実地の調査に併せて皇陵に關する古い記録

を調べたり、古いことを知っている老人に話をきいたりして、記録や伝承の誤りを正し、長い苦勞の末に、「陵墓十七図」を作製した。それを遙か江戸に住む伴信友に贈つた。そうした光平の業績がいつしか天皇の御耳に達し、特に手厚い御沙汰書を賜つた。光平は感激し、ますますその御恩に報い、国のために力を尽すことを心に誓つた。

ちようどその頃、黒船來航のあわただしさの中で、徳川幕府は、たびたび天皇の詔勅に違反し、その上外交の進め方がわからず、うろたえるばかりであつた。政治に關する議論が沸き立ち、世の中全体が大きわぎになつた。光平は、この状況を心配し世を救う志あるものを集めて、ひとはたらきしなければならぬと考へた。時はちようど、文久三年癸亥みづのといの年の秋であつたが、朝廷の論議が一つにまとまり、孝明天皇御自ら京都の南、大和の神武天皇陵に行幸し攘夷の決行を誓われるいうことになつた。その時、藤本真吾、吉村重郷、松本衡らは、たがいにはかりごとをめぐらし、前侍從中山忠光を盟主に推したて、大和の十津川郷で、

尊王攘夷の大義を世に先がけて主張し実行しようとした。光平は自ら進んで十津川郷に行き、その計画、世にいう天誅組の義挙に加わり、力を尽した。ところが会津と薩摩の二藩が、朝廷と幕府の中に入って奔走したため、一旦は決まっていた朝廷の考えが動揺し、朝廷の中心勢力であった三条実美公たち七卿が失脚、西の方長州へおちのびることになり、(今までとは順逆がたちまち反対となつてしまった。)そうした政変があつて天誅組の雄大な計画も崩れ去り、あげくの果て、光平は幕府の役人に捕えられ、牢獄に数か月を閉じ込められた。光平は獄に在りながら、天誅組や自らの行動を思い起し記録した。『南山踏雲録』がそれである。

光平は元治元年、甲子きのえねの年の二月十六日、京都の獄舎で斬殺された。享年五十二歳であつた。実行を伴わず自分勝手な意見を繰り広げるのは、儒学を学んだ人のよくすることだ。世を憂え正義が行われないこ

とを慨いて悲壮な歌を歌つてよろこぶのは壮士だ。そんな儒生や壮士は世の役に立たぬ。在野の人でありながら国家への忠義を唱え同志を率い、武士でもないのに戦場に立つて剣を手にし、人の道を実行しようとする人がいる。私はそのような人こそ忠正剛毅の心もち主と見るのであるが、光平はまことにそうした人物であつた。

明治二十四年十二月十七日朝廷は光平の忠義をほめ、特に従四位の位階を贈られた。光平にとっては死後の名譽といふべきである。

いま八尾を郷土とする人々が相談し、光平の功績を後世に伝えるために、碑を建て、その名を石に刻んだ。石碑が永久に存続するのと同じように、光平の功績も永遠に伝えられることであろう。

大正三年十一月

松蔭 大西啓太郎 撰
銅柱 渡邊 信義書



高さ1丈6尺、幅3尺6寸、厚さ4寸、台石2尺、それに「贈従四位伴林君光平碑」と表に隸書で刻まれ左下に小さく「正二位勲一等伯爵田中光顕題」とある。裏面には碑文が590字で刻まれている。



表面

贈從四位伴林君光平碑

正二位勳一等伯爵 田中光顯

裏面

伴 林 光 平 君 碑

君諱光平通稱六郎家世志紀郡林村尊光寺住侶考諱謙讓君其第二子少壯出遊洛寧之間究儒佛因攝之間修國典後又從伴信友于江都然宗主責以其放浪破規促歸住之急君甚有窘色信友慰諭且囑云倭河二州皇陵星布而荒廢埋沒我欲探討檢覈之日久矣而未果吾子其成之君感憤歸鄉再被緇衣稱周永住職于若江郡八尾鄉成法寺村教恩寺此地實其址焉君狀貌魁岸音吐如鐘天資豪宕不拘小節一裘一葛自甘富貴不翳名器不卷傾檐破壁講書吟月而晏晏如雖然其說皇典論大義凜有使起懦大之慨一意唯圖 皇運之恢復有間則冒風雨而披荊棘跋涉山河而探檢聖蹟攻之舊記正之遺老遂製陵基十七圖遙贈之信友事達于 天闈特賜優錠君感激益期報効盡國事焉方是時幕府屢違詔勅且外交失錯政論鼎沸朝野騷擾君大憂之糾合志士將有所爲會文久三年癸亥秋廟謨一決有 車駕南幸拜 畝傍山陵而親攘外夷之議時藤本眞金吉村重鄉松本衡等胥謀推前侍從中山忠光爲盟主將唱義于十津川鄉爲其先君挺身赴之參畫甚力然會薩二藩周旋于朝幕之間廟堂議動條公等七卿西奔順逆歛交雄圖空敗遂爲幕吏所捕幽囚閱月其在獄也自叙其學而南山蹈雲錄在焉元治元甲子年二月十六日被斬于京獄享年五十又二空論模議儒生所能悲歌慷慨壯士所喜至草莽唱義 率其徒矢石提劍而成其仁則吾見之於忠正剛毅之士而君實其人矣明治二十四年十二月十七日朝廷追賞其忠節特贈從四位可謂有餘榮矣今茲鄉儻相謀建碑勒名貞珉萬古遺烈千秋

大正三年十一月

松蔭 大西啓太郎 撰

銅柱 渡邊信義書